

日本万国博の意義

歴史的意義と意図

歴史的意義 万国博覧会は、最初に開催されたのが1851年（嘉永4年）のロンドン博で、以来20数回にわたって欧米各国で開かれ、すでに120年の歴史を持つ国際行事である。

スポーツの祭典近代オリンピックが、ギリシアのアテネで最初に開催されたのが1896年（明治29年）であることと考えあわせれば、万国博はそれより45年も前から人類文明の向上と、国際親善に大きな役割りを果たしていたことになる。

わが国が最初に参加した万国博は、フランス皇帝ナポレオン3世の招請で、徳川幕府と薩摩、佐賀の両藩が参加した1867年（慶応3年）のパリ博で、以来、わが国は各国で開かれた万国博に積極的に参加してきた。

徳川幕府の長い鎖国政策のため“世界の孤児”となっていた日本が、急速に近代化し発展した裏には、新しい発明や発見を生んできた万国博に進んで参加し、日本を国際社会に紹介すると同時に、先進文明を吸収してきたという過去の積重ねがあったのである。

その万国博に出展参加するだけでなく、これを自国で開催することは、明治、大正、昭和の3代にわたる日本の夢であった。

万国博の日本誘致計画は、過去2回あった。最初は明治23年（1890年）だったが、これは時期尚早で見送られ、次に昭和15年（1940年）、紀元2600年の記念事業として準備され、前売り入場券も発売されたが、戦時体制にはいったため、東京オリンピックの計画とともに中止された。

万国博は6ヵ月間にわたって展開される大規模な人類交歓の国際行事であり、その開催には巨額の資金が必要である。しかし、経済的な要件を満たすだけでは、万国博を開催することは不可能である。主催国には豊かな経済力、幅広い高度の技術水準、高い文化とその発展を保障する自由な社会体制が要求される。とくに外国に対する参加招請は、政府ベースで行なわれるものであるから、世界に多くの友邦国を持ち、広い国交関係が樹立されていなければならない。また、真に平和な時代でな

ればその実現も成功も不可能である。

日本は第2次世界大戦に敗れ、平和国家として再出発し、経済的、文化的水準も高まり、国際舞台でも脚光を浴びるようになった。そして戦後20余年を経てようやく万国博開催の資格を備えるまでに成長し、その開催が実現したわけである。

昭和39年、わが国は東京オリンピック大会を開催し、成功させた。そして、その6年後の昭和45年に万国博を開催することを計画したのであった。

「人類の進歩と調和」をテーマに掲げ“永遠の平和”への願いと“21世紀へのかけ橋”としての意味とをこめたこの日本万国博は、日本の近代化が第一歩を踏出した明治維新からほぼ100年目に欧米の地を離れ、アジアで初めて開かれた万国博であった。またこれには、第2次世界大戦後、世界的な傾向として広がった発展途上地域の民族自立、経済的独立が、国際連合を中心とする国際協力によってようやく実を結び、発展途上国の国力が充実してきたという時代の背景があったことを見のがしてはならない。

さらに、宇宙開発をはじめとする科学文明の発達と、その中に生じた核兵器の脅威、経済の高度成長とともに深刻化する公害問題、西欧の合理主義だけでなく、多様な価値観、その土台となる多様なものの考え方など、平和と戦争、繁栄と貧困が混んとして存在し、大きな転換を求められている現代の矛盾解決への願いもこめられていた。佐藤内閣総理大臣も開会式のあいさつで「日本万国博は、文明史的にきわめて大きい意義を持つであろう」と述べている。

開催の意図 日本万国博は、輝かしい万国博の伝統を受継ぎ、世界の諸国民が産業、経済、科学、技術、文化、芸術など、人間活動のあらゆる分野で達成してきた創造的活動の成果を展示し、諸国民の間の理解と寛容の精神に基づいて、それぞれに築きあげてきた多様な伝統の相互交流を促進することによって、人類社会の調和のとれた発展に貢献するのが目的であった。

さらに日本万国博は、単なる科学文明の誇示ではなく、「人間博」を創造しようとするもう一つの意図をもって開会式で石坂会長が「今日の人類が解決を迫られているむずかしい諸問題を前にして、新しい人類のあり方をさぐる展望台としての役割りを果たしたいというのが、われわれの願いであります」とあいさつしていることは、これを物語っている。

科学文明の発達は、1世紀前に期待されていたもの、またそれ以上のものを実現し、人類の生活のすみずみまで行きわたり、日常化されたばかりか、人類の行動範囲を宇宙空間にまで拡大した。ところが、人類が自らの住む地球を振返ったとき、史上いまだかつてないほどの重大な岐路に立っているのを知った。

人類の明るい未来を約束した科学文明は、一方では戦争技術と結びつき、人類自らが核兵器の脅威にさらされることになったのがそれである。いまや人類は皮肉にも人類自身が科学文明のどれいになり、そこからの解放を求めなければならなくなった。そのためには豊かな人間性を回復する人間自身の進歩が必要となったのである。

こうした人間性回復の必要性は第2次世界大戦を契機としてすでに深く感じとられていた。人間性を忘れた発展はここで反省の時期にはいり、異なる種類の価値が求められるようになった。これまでの万国博は欧米的な性格のものであったが、日本万国博では東洋的な性格を持たせることを意図した。それが「調和」の思想であり、この思想をとり入れた「進歩と調和」の理念は、明らかに日本万国博が新しい歴史的次元に立つものであることを示したのであった。

日本万国博がめざしたものは、世界にはさまざまな文明が多角的に共存することを、理解と寛容の精神によって認め、それらの多様性の調和の中にこそ進歩が望まなければならない、という「調和的発展」の精神であった。これは東洋思想の「和」の心を現代世界に呼戻して、東西を結ぶ新しい理念として発展させようとするものであった。

「調和的進歩」の精神の根底には、人間の生命自体の尊重がなければならない。そして、さらに、人間らしい生きる喜びをつくり出す“生命の躍動”がなければならない。これが人類の偉大な未来を築くのである。

現代では、文化は1国、1地域だけで進歩するものではない。世界の多様な文化の特徴と、そのよさを尊重し、世界の諸民族がお互いの文化を理解しあってはじめて、

人類の進歩がある。この意味で、今日ほど世界の協力と理解、人類全体の調和、つまり世界の平和的発展が強調されなければならない時代はない。

博覧会はいままでもなく哲学者の会議場でも、商人が利益を求める見本市でもない。それは、参加各国の文化的遺産や創造的活動などの展示を通じて、平和を願う人間交歓の場である。日本万国博は、この博覧会の精神が、広く学びとられ、人類の希望をつなぎ、歴史の転換期を開くにふさわしい意義のある博覧会であった。

博覧会はまた、現実の世界を直接改革する場ではない。しかし、日本万国博は新しい時代への機運をつくり、あすへの道標とモデルを積極的に提供することによって、未来社会へのかけ橋を築く手がかりを示した。それは課題の解決ではないが、問題の提起と、解決への展望を示すものであった。

博覧会はもちろんユートピアではない。博覧会が矛盾の多い現実社会の影響を免れえないものである以上、日本万国博にも具体的な姿で、不都合も、矛盾も、欠陥も存在した。しかし、それによって日本万国博が持つ本来の歴史的意義は、決して失われなかった。日本万国博は現代の苦悩と混乱の中にもありながらも、世界を日本国憲法が希求する「完全な平和」が支配し、真に人類の幸福をたたえるものとする努力を、次の世代に伝えようとした“希望の中継基地”であった。

この希望は、単なる夢想ではなく、現実の要請からくる切実な願いであった。人間が自ら創造してきた文明全体を、いま一度「人間」の名において問い返そうとする、歴史的反省にささえられた希望であった。

第2次世界大戦後の第1種一般博覧会は、ブリュッセル博（1958年）とモンリオール博（1967年）で、日本万国博は3回目の開催であった。ブリュッセル博では、テーマ「より人間的な世界へのバランスシート——科学文明とヒューマニズム」を、モンリオール博ではテーマ「人間とその世界」を掲げ、いずれも人間社会に目を向けたものとして、その底に共通したものがあつたが、日本万国博はさらに進めて、洋の東西を問わず人間の原点に立戻ることを願ったのであった。

日本万国博は、参加国数、入場者数ともに万国博史上最高の記録を作った。しかし、真の誇りは、これらの数字ではなく、アジアで初めて開催され、多数の発展途上の国々の参加を得て、その会場が人間交歓の場となり、そして、未来の人類のために新しい万国博を創造した点

であった。

万国博には主催国日本を含め 77 カ国、4 国際機構、1 政庁、6 州、3 都市、ノ国内地方公共団体、2 外国企業、28 国内企業・団体が出展参加し、世界の民族が手を取り合って共通の喜びに浸った。その情景は宇宙中継によって世界各地に伝えられ、宇宙時代にふさわしい“世界の広場”となり、輝かしい“人間博”を現出した。そのなかで人々は国際協調がいかに大切であるかを身をもって知った。

参加国政府を代表して、パトリック・リード・カナダ政府代表は「日本万国博は伝統ある万国博のなかで、おそらく最大のものとして、永久に人々の心に残るであろう。この博覧会は世界の国々と人々が平和のうちに協力し、競争する機会が与えられるならば、どのようなすばらしいことでも達成できる事実を明白に示した」と閉会式のあいさつで述べている。日本万国博が「人類の進歩と調和」という高い理想を掲げた理由は、まさにこうした点にあった。また、日本万国博によって日本人自身が日本を見直す機会ができ、そして、社会、経済、文化、技術、教育など、あらゆる面に効果的な刺激を与えたのも見のがせないことであった。

日本万国博には反省すべきところも多かった。そして現実社会には解決の困難な課題が山積している。東南アジアの戦火は依然として続き、中華人民共和国をはじめ、日本となお正式な国交のない因も存在している。経済の高度成長のかけにある公害、物価高なども深刻化している。これらの矛盾に対し、われわれは日本万国博の成果を忘れず、それを現実を生かし、よりよい社会づくりへの努力を続けなければならない。

日本万国博覧会名誉総裁の皇太子殿下が閉会式で

「“人類の進歩と調和”という理想の火が、良く人々の心の中に燃え続けることを期待してやみません」と述べられたように、日本万国博を真に意義あるものとするかどうかは、今後の人類の努力にかかっているといえる。

概 観

会場計画とその意義 日本万国博は、国際博覧会条に基づき第 1 種一般博であった。これは日本万国博の基本的性格を決定づけた。

その第 1 は、第 2 種の博覧会や特別博とはちがって、万国博の中では最大の規模を持つ点である。したがって

広大な会場は、6 ヶ月にわたり、世界各国の参加によって文化、産業など人類のすべての業績の展示の場となり、各種の催し物も織込んだ人間交歓の場となるのである。第 2 は、参加各国は自らの名と責任において展示館を建設し、展示運営を行なうのを原則としている点である。したがって出展参加の主役は各参加者であり、主催者はむしろ万国博の開催趣旨にふさわしい舞台づくりの役目を受持つのである。

次に会場の位置と地形も、日本万国博の会場計画や関連事業に大きな条件を与えた。会場の位置は、京都、大阪、神戸の大都市のいずれにも近く、また、東京、名古屋などの東からと、中国方面などの西からとを道路で結合する地点であり、さらに、鉄道、空路の便もよく、交通上好条件を備えた位置である。このような良好な位置にありながら、この土地は水利の便の悪い、起伏の多い丘陵地であるという不利な自然条件のため、ほとんど未開発のまま残されていた。このため、土地開発や、鉄道の導入、道路の新設など関連施設の整備を必要とした。

また地形は、海拔 20 ㍎（東側）から 80 ㍎（西側）のゆるやかなこう配の丘陵地で、東側の砥いところから教条の谷が人間の手のひらの形に広がる、起伏の多い地帯であった。日本万国博がこの新しい地域を開発して会場を設けることは、施設の整備の面では困難があるとしても、会場敷地が一つにまとまることと、新しい土地の上に自由な計画と設計ができるという点で有利さをもっていた。

以上のような日本万国博の基本的性格と会場予定地の自然条件のもとで会場計画が進められた。

日本万国博は、万国博の持つ進歩性、総合性、大衆性などの性格を生かしながら、テーマの精神に沿って世界の産業、文化の祭典にふさわしいものとなるよう、計画された。

会場計画の第 1 の主眼は「人類の進歩と調和」というテーマの持つ理念を、形や空間として、会場のなかでどのように展開するかという点に置いた。こうして会場全体が快適で調和のとれたものとなり、“人間交歓の場”となることを強調し、その造形化の場合に“人間的条件”を最も重要視した点が日本万国博の会場計画の大きな意義であり、特色であった。

会場計画の大きな特色は、次の 2 点であった。

第 1 は、会場の空間構成が直接テーマを展開する場と